

〔読者の声〕 里見八犬伝にみる武士道

(作詞・作曲家 高橋育郎)

里見八犬伝にみる武士道と題してお話させていただきます。

きっかけは、平成 25 年 10 月 19 日 千葉市文化センターにて行われた劇団影法師による大型人形劇ミュージカル「里見八犬伝」を、館山市の里見香華先生から案内を頂きましていただいたの感想です。

ジェームス三木の脚本演出によるこのミュージカルは、新しい解釈によって構成されていました。犬の八房が、人間になっていたところなどです。

舞の幕には「仁、義、礼、智、忠、信、孝、悌」の八文字が浮かびあがっています。これを見た私は「これは武士道だ」と思いました。

ところで私が里見八犬伝を知ったのは、昭和 19 年 国民学校 4 年生でした。

戦時中のことで、あの頃はけっこう、ゆとり教育でした。先生が本を読んでもくれたり、紙芝居を見せたり、歌をうたったりといまでは、考えられないことでした。

実は担任がこのお話のファンで、とにかく大長編ですから全部とは行きませんが、好きな場面だけを読んでくれたのです。顔をまっかにして力をこめて読んでいたのが印象的でした。

25 年ほど前には NHK テレビで人形劇が連続して、二年間放送され、私はときどきみました。とにかくこの物語は人気を保っていて、舞台に映画にと、ほとんど間を置くことなく演じられていますね。

さて、武士道といえば、とっさに思い浮かぶのは新渡戸稲造の武士道です。

その話はあとにしますが、原作者の滝沢馬琴は「水滸伝」や「三国志」などをモデルにしているとされています。でも私はもっと身近な日本のお伽噺「桃太郎」が原点にあったと思われました。桃太郎が鬼退治に出かける時、犬、猿、雉が相伴になります。そして団結して鬼に立ち向かいます。勧善懲悪のお話ですね。

八犬伝と共通するところです。犬は仁、猿は知恵、雉は勇気を表します。すなわち智仁勇です。八犬伝には勇の文字はありません。ですが勇は八犬士が共通に持ちあわせています。悪に立ち向かうには勇気が必要だからです。勇は共通事項ですから、除いたものと思います。

この智仁勇は儒学の三徳といわれ「智の人は惑わず。仁の人は憂えず。勇の人は恐れぬ」と云われて、孔子は大いなる徳であるといっています。

また、孫子は兵法の中で、將軍は智仁勇信嚴の五条件を満たした人物でなければならないといっています。そして第一は智で「勝算なければ戦うなかれ」といっています。桃太郎は勝算があつて鬼が島を攻めたわけです。

また歌舞伎で有名な勧進帳の安宅関は、智は弁慶、仁は富樫、勇は義経といわれています。馬琴は当然こうした話は知っていたでしょうから、これらはヒントにしていると思います。ただこの三文字では、大長編小説には、物足りません。そこで、馬琴は武士道の持つ徳をもっと幅広いもの、三徳でなく八徳に拡大してスケールの大きなドラマに仕上げたものと思われます。

それでは武士道はいつ発生し、どのように進化を遂げたのか、武士階級が確立するに至る歴史を見て行きます。

2012 年、NHK の大河ドラマで「平清盛」が放送されました。清盛の誕生と成長の物語ですが、清盛が幼少時の平家は貴族の用心棒にすぎなかったのです。自分たちを番犬とさげすんでいました。桓武天皇を祖に仰ぎながらも、清盛はこの鬱積した身分を何とかして貴族に近付け追い越そうと並はずれた努力を重ねて、権力を身につけていきました。要するに政治的発言力を持つまでに至り、権力（太政大臣）の座についたとき、武士を捨て貴族になってしまいました。その機を突いて立ちあがったのが源頼朝でした。彼は鎌倉を根拠地とし、平家を打倒し、鎌倉幕府を開いて、武士の政権を打ち立て、封建制度を確立しました。

武士は刀や弓矢といった武器を常に持ち歩き使いこなします。したがってこれら武器の使い方を誤れば、人を無暗に殺傷してしまいます。そこで、十分な管理を徹底させる。そのため精神性を高めコントロールが働くようにしました。

ここに武士の心得が生まれ、高度に磨かれていきました。

里見八犬伝に見る武士道 その2

ところで武士の存在は、それ以前はどうなっていたのでしょうか。

古代、大和朝廷に遡りますと、「続日本紀」（しょくにほんき）に「文人武士は国家の重んずるもの」と、ここで武士という言葉が出てきます。ただ武士と言いながら武官の意味が強く、官僚の内部組織に位置づけられたものでした。

平安朝になって、検非違使（警察）の形で新しい軍事力となり、白河上皇のときに置かれた制度として御所の北面の警護に当たったのが「北面の武士」など言われました。中で歌人として名を挙げた西行は拔きんでたエリートでした。しかし、まだ貴族の雇われに過ぎません。さて、平清盛は、ついに検非違使別当という最高の役職に付き、天皇を直接警護しました。

奈良時代の律令である大宝律令は 709 年のこと。その荘園は平安朝の末代になって、718 年に養老律令になると、律令制が崩れてきて私的な荘園が発生し農地の増加を図ろうとするものが現れてきたため、墾田私有化である三世一身法が 723 年に成立し、ここで荘園を守るための軍事力が生まれます。本来、耕作地には国（朝廷）のものとして税がかけられていましたが、貴族や大寺院の所有地には税がかけられず、国司の監査も入らない。そこで権力の真空地帯が出来てきました。

橘諸兄（たちばなのもろえ）684～757 光明皇后は異父妹。聖武天皇を補佐し、大仏殿建立を取り仕切った。三世一身法 永年私財法に尽力。

一方、三世一身法は三世代と限度があって、墾田私有者には、せっかく開墾した自分の所有物も期限がくれば国に返さなければならず、積極的に開拓する意欲が減退し、不公平さもあって不満が蔓延して、税収不足が生じてきたため、墾田永年私財法（743 年）を公布しました。このため、有力農民は積極的に荘園をひろげて行きました。そして次第に力をつけていきます。境界線の利水権などもめごとなどは、自前で解決するようになり、警察力、裁判も自分で行使して律令外存在として武装集団が強固になっていきました。

鎌倉幕府（かまくらどの）の成立で、幕府に所属している御家人（武士）は将軍との関係が、御恩と奉公の形になり、戦地では運命共同体の感覚が濃くなっています。

ところで鎌倉時代は大きな争いが多く、幕府と天皇家の二元性が起因して、承久の乱（1221 年）は後鳥羽上皇が北条義時を追討し、更に二度にわたる元寇があつて、ここでは武士の勇ましさは、恩賞を被るといった打算が先だっていました。この時代、軍事力は基本的に領主個人のものとなって、費やした軍事費は自弁であり、支給されるものはなくなり、戦争で軍事費を使っても恩賞はなく、たちまち破綻し没落する。元寇の影響はこの点が目立って噴出しました。そこで、より有力な他の御家人の勢力下へ下ったり、散々な目にあって、不満がつのり倒幕へと向かいました。

そうしたことから建武の中興を経て室町幕府が成立（足利尊氏 1338 第 16 代・義昭 1588 年）。こ

の時代、中央貴族、寺社、武士などの権利義務が重層化、複雑化して自立的村落が発生し、荘園はゆるやかに解体していきます。この間、基本的に武士の行動規範は「御恩があるか」が機軸になり、「御恩がある限りついていく（忠君）勇敢に戦う（勇猛）」といった倫理観を持つようになりました。

だが、応仁の乱以降、これまでの土地を媒介した支配秩序は崩れ、貨幣経済がすすむにつれて、零細領主は没落。大きい領主の支配下に入ります。

こうした淘汰の中、武士の形に変化が出てきます。土地を持たなくても実力ある武士は傭兵となって戦闘に加わり武器を保有し、戦場で手柄を立てて立身出世する。（信長に仕えた藤吉郎・秀吉の例）槍の出現と、兵力の大量投入が図れ、戦場の様子は一変し、軍事人口が激増。そこで武士としての自覚が問われ、倫理として武士道と言われるようになりました。

実力主義が付与されて、家柄以上に個人の武勇が評価されるようになり、主君は新しい武士をとりまとめ、戦って行くうちに情誼的一体感が生まれ、君臣関係が成立。家臣は主君から俸禄や土地を直接貰うことから運命共同体意識が強固になり、君臣は一体化していきます。

里見八犬伝に見る武士道 その3

さて、里見氏が安房へ入国したのは、里見義実で康正 19 年（1456）のこと。1467 年に応仁の乱がおき、戦国時代となって、足利氏が滅び、信長から秀吉政権へと移っていく。太閤秀吉政権は刀狩りによって戦闘者を非武装化し、太閤検地を行い農民は農村から離れないようにし、武器を持たせないようにした。また、検地によって荘園は解体しました。

里見氏が館山城に移ったのは天正 19 年（1591）義実から数えて 7 代目の義康のときでした。足利政権下にあり、北条早雲が没したときです。

それから 12 年後、大阪夏の陣を経て、江戸期になると無戦争状態になり、そこで戦闘者は自己とどう向き合い、大名は彼等をどう維持していくか、模索がはじまりました。主君との情誼的一体感を大事にする一方で、戦闘が封じられ、戦う場を失った武士たちは功名を立てる余地がなくなる。そこで武士の生き方が問題視され、武士はかくあるべきとの教本（テキスト）が出てきた。

「武士は恩賞目当てに働くものではない」として、儒教の倫理観が価値あるものとして教えられ、武士の身分と存在感を高め、ここに士農工商の身分制度が確立します。主な教書は高坂昌信の「甲陽軍鑑」、大久保彦左衛門の「三河物語」、山本常朝の「葉隠」、山鹿素行の「山鹿語録」、大道寺友山の「武道初心集」、窪田助太郎清音(幕府講武所頭取)などです。

この価値観が徳川 300 年の世を支配し、武士は特権階級であるがゆえに行動の共通規範が必要であると説いて、武士道が確立されていきました。

ここに万延元年(1860) 山岡鉄舟が「武士道」を著わしたのです。神儒仏の三道融和は、武門にふさわしいと鉄舟は、武士道を明確に示しました。桜田門外の変が起きて、幕末の騒乱が始まってきたころでした。薩長連合軍が官軍の名のもとに倒幕を成功させ、天皇を擁立し明治維新を成し遂げます。新政府は近代化のもとに「四民平等」を唱えて、ここに武士は消滅しました。

一方、富国強兵策によって軍隊が組織されます。明治 15 年(1882) に軍人勅諭が發布され、ここでは忠節、礼儀、武勇、信義、質素の五徳が主文で説かれ、天皇に仕える「忠節」を重んじました。なお、山岡鉄舟は、明治天皇の侍従となり教育掛をつとめました。

日清戦争以後、井上哲次郎は国家主義を、内村鑑三、新渡戸稲造は武士道を説き、そして鈴木大拙は禅でそれぞれ精神論を説きました。新渡戸の場合は、カルフォルニアで療養中に西洋の騎士道と比較し、日本人の倫理の核となる武士道を英文で書いて、世界のベストセラーになりました。

新渡戸は、欧米に留学し欧米の文化、宗教ではキリスト教の洗礼を受けたことで、欧米と比較しながら、ひろい視野に立って武士道を説いていきます。

そのよりどころを先ずは仏教に求め、運命に対する信頼。不可避なものへの静かな服従。禁欲的平静さ。生への侮蔑と死に対しての親近感を挙げ、次に神道では主君に対する忠誠。先祖への崇敬。孝徳心を掲げ、儒教では、孔子の格言と孟子の思想(人民主権的理論、思いやり)。王陽明の陽明学は「知行合一」を説き「論語読みの論語知らず」は駄目といって、実践を重んじ、幕末維新以後の運動家に影響を与えました。

新渡戸以前に影響を与えた人物は、吉田松陰 高杉晋作 西郷隆盛 河井継之助 佐久間象山らが挙げられます。

里見八犬伝に見る武士道 その4

江戸期には寺小屋、藩校といった教育機関が発達していて、「四書五経」といった儒教はよく身に付け、識字能力も高く、新渡戸は両親からの教えもあって、幼いころから知識を身につけていた。新渡戸は「武士道」に思いをいたしたとき、日本にはこの神仏儒の三教があって精神的支柱をなしていることに気付いたのです。新渡戸は著作の中で、次の言葉を選んだ。

義・・・サムライのなかで最も厳しい規律。不正を戒めた。

勇・・・孔子は「義をみてせざるは勇なきなり」。正しいことは、義によって発動される。
 仁・・・思いやり。憐憫。愛。寛容。同情。これらは徳の中で至高のもの。
 礼・・・相手を敬う。社交上不可欠。茶道では精神の修養として重んじる。
 誠・・・武士に二言はない。だから証文はとらない。嘘をつくのは臆病、弱者であり不名誉。
 名誉・・・幼時から教え込まれている。新井白石は「不名誉は木の切り傷の如し」といった。
 忠義・・・個人主義の西洋と日本では異なる。アリストテレス、ソクラテスは国家を重んじ、日本は君主に対してのもの。
 品行・・・武士の教育は品行を高めること。金銭を忌み嫌い、損得勘定で物事を考えない。
 感情・・・人は感情の動物と言われるが、感情をやたら顔に顕さない。
 切腹・・・忠臣蔵の四十七士を「義士」として称賛する。「ハラキリ」は野蛮な行為と西洋から見られているようだが、実は西洋も歴史的に見れば、潔い行いとして行われていたことを説く。日本だけのものではないのだと。乃木大将の殉死を称賛した。
 刀・・・刀を殺傷に使わない。武士の求める究極の理想は「平和」とした。
 女性の理想像・・・一心同体「内助の功」 男尊女卑を否定。
 大和魂・・・「花は桜木、人は武士」といわれ、庶民（平民）にも広がり、武士道は蘇る。欧米から「小さなジャップ」と侮られたが、日清戦争の勝利で日本は評価され、徳目が注目される。時代は変わっても不死鳥の如くであるとする。

ところで新渡戸稲造については、中学生の時に知りました。「クラーク先生」が教科書に載って、ここで先生から教えられた。

クラーク先生は、札幌農学校の初代の教頭として大きな足跡をのこしましたが、明治 10 年、契約期限がきれて帰米するとき、見送りに来た学生たちに「ボーイズ ビー アンビシャス」といって決別した。「少年よ、大志を抱け」である。

新渡戸はここで西洋思想に出会いました。こののち東大へ進学し「太平洋の橋になりたい」と大志をいだき渡米する。キリスト教の洗礼をうけ、クエーカー教の女性と結婚し、明治 24 年帰国。多忙な教育者として活躍するが、一人息子を失い、過労もあって体調を崩し伊香保温泉に療養するが、更にカルフォニア州で 2 年間静養し、ここで「武士道」を英文で書いて発刊した。この序文によれば、それより 10 年前、ドイツのボン大学に留学中、ベルギーのリエージュ大学教授ラブレに教えを受けた。その折、一緒に散歩する機会があり、ここで話が宗教問題になったとき「日本では宗教教育をやっていないようだが、徳育教育はどうやっているのか」と聞かれ、さらに「日本人は最も大切な善悪の区別ができるのか」と問われた。これがきっかけで「武士道」を書いたといっています。それが全世界に普及して読まれ、日本にも翻訳書が出て国内にも浸透した。先のルーズベルト大統領の斡旋も力になりました。

父の本箱には新渡戸の「世渡りの道」という著書があって、中学生の時、読んだのですが、中学生で知ったせいか親しみがあがり、今回 里見八犬伝の人形劇を観ているとき「ああ、これは武士道だ」と思ったのは新渡戸の武士道を思っただけのことでした。

逆に新渡戸が武士道を記すとき、八犬伝を念頭に思い浮かべたことがあったかどうか残念ながら不明です。

里見八犬伝に見る武士道 その5

新渡戸は国際連盟の事務次長にまで昇りつめ日本が誇る国際人であるが、武士道が人類平和の精神であることを強く訴えた。昭和 8 年 72 歳で惜しくも病没。日本が国際連盟を脱退し、暗黒の時代に向かっている時でした。

昭和 59 年に五千円札の顔になって、更に親しまれました。さて「南総里見八犬伝」は、滝沢馬琴が江戸後期の文化 11 年（1814）に 28 年の歳月をかけて天保 13 年に世に出した大長編小説ですが、詳しいことは博物館館長さんからお話がありましたから省略します。

八犬伝の話のはじめは、伏姫が犬の八房の気を受けて懐妊した時、身の潔白を明かすため父義実が見守る中自害した。このとき伏姫が幼い時、役（えん）の行者から授かった護身の数珠、八つの珠が八方に飛び散って、この霊玉がそれぞれ生まれた子に刻まれて、八犬士となって登場する。この霊玉こそ武士道の教えになっているわけです。

八犬士を紹介すると、

まずは犬江親兵衛仁（さとし）「仁」は儒教の根本理念で、自他の隔たりを置かず、一切のものに親しみと情けを深くする。愛情、いつくしみ、おもいやりの心。

犬川莊助義任（よしとう）「義」は道理。人間が行うべき道。利害を捨て、条理にしたがい人に尽くす。

犬村大角礼儀（まさのり）「礼」人の行うべき道。社会の秩序を守る元、互いに敬意をはらって生活する。

犬坂毛野胤智（たねとも）「智」物事をよく理解し、かしこくわきまえていること。是非の判断をする心の作用。

犬山道節忠与（ただとも）「忠」主君に対して臣下としての真心を尽くす。忠実でまめやか。

犬飼現八信道（のぶみち）「信」欺かないこと。言をたがわぬこと。信用し疑わないこと。帰依すること。

犬塚信乃戌孝（もりたか）「孝」父母によく仕え、大切にすること。

犬田小文吾悌順（やすのり）悌は兄、長者につかえ従順なこと。弟や長幼の情誼に厚いこと。

里見義実が安房、稲村城に移ったのは康正 2 年（1456）のこと。応仁の乱は 11 年後に起きました。そして天正 19 年（1591）、義康は岡本城から館山城に移した。

以降、城主は八代目の忠義まで続いたが、慶長 19 年（1614）9 月、徳川により、忠義は安房の領地を没収され伯耆の国倉吉へ移封され、里見家は崩壊しました。館山城も破却されたのです。

（大阪冬の陣の年）

158 年間にわたる治政下、地域の人々は良民と呼ばれ、城主を崇敬し、その間、国府台合戦（千葉県市川市）など波乱はあったものの、よく仕え善政のもとに暮らしていました。

伯耆に移封されたことは悲劇とみられ、波乱の中に、この善政を馬琴は武士道の顛れとみたのではないのでしょうか。馬琴は同情の念もこめて八犬伝の物語を書き上げたものと思います。

さて、館山市は八犬伝の下地となった里見氏の歴史を NHK の大河ドラマにして、全国に向けてアピールしようと目下署名活動を行っています。題して「里見氏物語」である。武士道を反映しての日本の心の再発見ともなる、このドラマ。NHK の大河ドラマを実現させることは、大変ではありますが、この悲願を何とか成功させたいと祈念しているところであります。 (了)